# 読書の崩壊と文化的公共圏

## 一　本は読まれなくなったのか？

日本ではここ十数年間で、本を読まない若者の率が激増している。読売新聞社の調査によれば、「一ヵ月に一冊も本を読んでいない」人の割合は九〇年代には八〇年代の三倍近くに激増しているし、毎日新聞社の調査でも、高校生で「一ヵ月に一冊も本を読まない」人は、九八年には七五年の約二倍の六七パーセントに上っている。全体として、書籍がひとしなみに読まれなくなっているわけではないが、まったく本を読まないか、あるいはほとんど読まない層は、確実に増加の一途をたどっている。とりわけ中高生の読書離れは、国際的に見ても突出した状態を示しているようだ。このような動向のなかで、多くの出版社や書店が慢性的な不況、いや、それどころか急速な経営の困難に悩んでいる。

だが、この現象を単純に書物というメディア全体が、同じように衰退しつつあることの現れとみなすことはできない。たしかに社会全体としてみるならば、今日ではビデオやテレビゲーム、インターネットなどの普及により、映像メディアやコンピュータが圧倒的に有利な立場に立っている。子どもたちにとっては本よりもテレビゲームのほうがずっと身近なメディアだし、若者たちにとっては携帯電話が、テレビやマンガへの関心すら凌いでいる。しかも、研究者の情報入手ですら本からインターネットに重心が移行している。しかし、本が中心的なメディアではなくなったとはいえ、出版物の総量はまだなお増え続けている。出版物の点数が激増し、またそのことが一点ごとの売れ行きを限界づけていることもよく知られる通りである。また、他のメディアからの情報入手が読書を促している面も見逃せない。したがって、近年の顕著な読書離れを、単純に、いまわたしたちの社会の全域で起きている「活字メディアからデジタル・メディアへの移行」、というより全般的な現象に直結させることはできない。

グローバルな情報化の潮流は基本的に、国ごと、言語圏ごとに閉じていたこれまでの出版市場の壁を壊していく傾向を持っている。したがって、すでに紙の出版物が自国語市場に対して飽和状態にあったかに見える日本のような国では、現象的には、人々がますます自国語の本を読まなくなっていくことになろう。だがその場合でも、日本語の出版市場がすぐさま崩壊してしまうというわけではない。少なくとも大衆的で余暇的な読書に関していえば、あいかわらず日本はかなりの規模の自国語市場を維持し続けるのではないか。大衆的な週刊誌や月刊誌、ビジネス書や軽い読み物、情報誌などにかぎるならば、少なくともここ五年、十年で人々の読書習慣が劇的に衰退してきたとは考えられない。

それに、日本でこそ若者たちの読書離れは顕著な現象だが、これをどこまで世界的に共通の現象と考えることができるのか。アメリカからの報告によれば、大多数の子どもたちがほとんど本を読まずテレビを見てばかりいるのは、けっして最近に始まった現象ではないという。またイリノイ州のある調査では、一九二〇年代から現在まで、少年たちの読書習慣はほとんど変化していないと報告されている。もちろんこれとは反対の議論もあるが、全体としてアメリカでは、読書全体の崩壊よりも読書習慣の貧富

の格差による以前からのギャップの方が深刻な問題のようだ。それどころか、グローバル化のなかで英語出版物の販路が拡がり、一部の大学出版局などは、持続的に事業を拡大させてきている。また、イギリスでも、近年、顕著に人々の読書習慣が衰退しているとの報告はなされていない。イギリス国民の七割が週に一度は読書をしているとされ、『ハリー・ポッター』のようなミリオン・セラーの登場も含め、出版社が日本ほどに困難な状況に直面しているわけではないようにも見える。さらに中国では、出版や表現の自由への制限がかなり緩和され、本の種類や内容が多様化したことにより、若者たちの読書への意欲は以前よりも強まっている。テレビの浸透により読書時間が削られる傾向もあるようだが、全体として現在、読書への人々の関心は強まりこそすれ衰えてはいない。中国語の出版市場はこれから教育水準の上昇や余暇時間の拡大によってますます活況を呈していくであろう。もちろん、これらのいずれの国においても、より長期的には映像メディアの多様化やインターネットの浸透により、人々の思考と活字の結びつきがますます弱体化していくことは懸念されている。しかしそれでも、情報化にともなう読書習慣の衰退という現象は、必ずしも国により同じように現れているわけではない。

## 二　文芸的公共圏の崩壊

そこで、話の焦点を、読者市場内部の質的な構造に移してみよう。日本の出版界はこれまで、アジアの国々のなかでは例外的に分厚い自国語の読者市場を有してきた。知識人だけで、すでにかなり大規模な読者市場を形成し、したがって学術的な専門書の世界と一般書の世界がかなりはっきり分離している



アメリカとも、自国だけでは閉じた読者市場などそもそもあり得ないシンガポールのような国とも異なり、日本の読者市場は前衛的な知識人と大衆的な読者をつなぐ、ゆるやかな言論空間を成立させてきた。いわば出版市場の経済的な構造に支えられて、ある種の「文芸的公共圏」が成立していたのである。このような近代日本独特の文芸的公共圏という大きな基盤の内部で、いわゆる「岩波文化」なり、「講談社文化」なりといった読書層とテクスト群を結ぶ関数形式の分割もなされていたわけである。

ところが、各種の映像メディアや携帯電話、インターネットなどによる新しいコミュニケーションの環境の形成と、出版市場のグローバル化・多メディア化による読者市場の構造の変化と並行して、こうした文芸的公共圏が根底から変容を迫られている。いくつかの読書に関する調査は、出版物全般が読まれなくなってきたというよりも、人文系の学術書や思想書、文学や古典などの「かたい本」がめっきり読まれなくなってきたことを伝えている。とりわけ、狭義の専門的な学術書と一般書の中間に位置するような、つまり旧来のイメージでいうならば、「岩波」「みすず」「筑摩」「中公」「勁草」「人文」等々といった形で語られてきた出版社群の支える読書文化が、その流通路の崩壊も含め、重大な危機に瀕しているのである。最近、大学の授業でかなり有名な出版社の文献を紹介しても、熱心な学生ですら、その文献はもちろんのこと、出版社の名前も聞いたことすらないといった顔をするのに愕然とさせられることが多い。全体として、読者市場の経済論理が知識人の著者と大衆的な読者をつなぐ空間を創出し、読書を通して文芸的公共圏が維持されていく構造は、すでに日本では成り立たなくなっている。

商業出版が「かたい本」でもそれなりの読者を獲得できていた時代には、パブリックな知へのアクセスの基礎的な部分は、ある程度まで論壇誌や単行本によって担保されていた。しかし、そのような教養大衆的な読者市場はゆるやかな下降線をたどり、今日では決定的に崩壊しつつある。しかも、全国紙や

全国ネットのテレビといったマス・メディアが、パブリックな議論の場としての役割を十分に担うことができるとは思えない。それらの報道はひどく東京中心の視点からなされているし、報道する側の意識全体が、記者クラブ制度や大企業型の人事管理によって、すでに独立したジャーナリストのありようからは著しく乖離してしまっている。実際、これらのマス・メディアは、地方のさまざまな場所で起きている重要な社会問題を不適切な仕方でしか報道できておらず、この種の旧態然たるマス・メディアに多くを期待することはできそうにない。

今日、われわれは、これまで量的にも質的にもかなり層の厚い自国語市場に支えられてきた文芸的公共圏が、歴史的にみるとどれほど特殊なものであったのかを、かなりの程度まで認識できる地点に立っている。日本で読書を通じたこのような公共圏が成立した時代は、『改造』や『中央公論』といった論壇誌が部数を伸ばし、円本ブームが起こった一九二〇年代まで遡れる。この時代、それ以前からの識字率の高さと大手出版社による大量生産体制が結びつき、ナショナルな規模での読者共同体が成立していくのである。そして基本的にはこの読書＝読者の体制が、戦後も連続的に一九七〇年代まで続いていくのだ。この時代、各種の文学全集や講座シリーズ、海外の文学者や思想家たちの翻訳書が、戦争と政治的変動をはさんでも変わることなく蓄積され続けた。ナショナルであることとパブリックであること、コマーシャルであることとアカデミックであることが、あたかも両立していたのである。こうした出版市場を通じてつくられてきた文芸的公共圏が、いまや急速に機能しなくなりつつあるのである。

グーテンベルク革命以降、近代の活字文化が成し遂げた最大の功績は、王や領主の権力を見せ物的に誇示してきたそれまでのスペクタクル的な公共圏に代わり、印刷された言葉を通じて人と神を結び、市民と市民をつなぎ、広範な人々に開かれる新しい公共的な知を可能にしていったことであった。この公



共圏は、根深くナショナリズムと結びつきもしたのだが、それがそれまでの身分や階級、地域、エスニシティなどの壁を突破する傾向をもっていたことを強調しておこう。

したがって、もしも今後、人々の本離れが本格的に進んだとしても、なおこれまで出版のメカニズムを通じて維持されていた文芸的公共圏（ここではこの言葉を、すでに述べた文芸的公共圏も含めつつ、より文化政治的な実践とも結びつく広がりをもった概念として用いたい）が別のかたちで、たとえばデジタル・メディアを通じて営まれていくなら、「読書習慣の衰退」をことさらに嘆く必要はない。今日、人々がすぐにこのまま本を「読まなくなる」とは思えないし、またもし仮にそうなったとしても、実用的、娯楽的な知識を本よりも電子端末から得るようになるだけならば、まだ決定的な変化とはいえない。文化の公共性を支えてきたわれわれの知的な活動の仕組みは、デジタル・メディア化のなかでやがては根底から変わっていくのかもしれないが、これは五〇年、一〇〇年の単位で進む長期的な変化であり、「人々が本を読まなくなる」というような中期の生活習慣の変化にとどまるものではない。だが、現在生じている読書の変容は、このような実用的、娯楽的なレベルにとどまるものなのだろうか。むしろ文化的公共圏の成り立ちそのものが、決定的に変質しつつあるのではないだろうか。

## 三　パブリックな知のゆくえ

読書習慣の衰退をより長期的な観点から考えた場合、むしろ問われねばならないのは、これまで主として出版文化が担ってきた公共的な語りや知の行方である。人々が「かたい本」をますます読まなくな

ってきている結果、人々が共通の文化的、社会的、政治的問題について語り合うような場が失われてきている。その一方で、政治的、社会的、文化的な多くの問題が広く開かれた公共的な場で語られ、論じられるべき必要性はいささかも減じてはいない。情報公開が進み、インターネットを通じてさまざまな市民的なネットワークが広がるなかで、そのようなパブリックな語りの場がいっそう必要とされてきている。とりわけ今日、さまざまなローカルな場がグローバルな問題と直結する新しい動きが生じている。しかるにナショナルな言説の大量消費に支えられてきた従来の放送や新聞のシステムは、変容するメディア環境の下、文化的公共圏としての役割を部分的にしか担い得ない。そうしたなかで、これまで比較的長い年月にわたり、単なるアカデミックな知とも、その時々のジャーナリスティックな知とも異なる仕方で文芸的公共圏を支えてきた人文書を中心とするこの国の出版文化に、本当にもう果たしうる役割がないなどと言い切れるのであろうか。むしろ、新しい出版と読書のどのような仕組みが、パブリックな対話の空間を可能にするのかを、より広い視点から考えていく必要があるのではないだろうか。

このような問題関心から、「人はなぜ、本を読まなくなったのか?」という問いを、わたしとしては次のように解釈しておきたい。一九二〇年代以来、日本では国土の隅々まで広がる密度の高い大衆的な読者市場が成立してきた。そこにおいては産業としての出版とパブリックな文化の担い手としての出版が、ある程度まで合致して営まれていく社会的な条件が存在していた。しかし、ここ十数年来の情報化・グローバル化の波のなかで日本の読者市場には構造変化がおこっており、このような「市場の論理」と「文化の論理」の幸せな結合は、すでに決定的な危機に瀕している。

出版そのものが、全体として一気に衰退するわけではないにしても、「人が本を読まなくなる」という傾向は、「かたい本」の分野では少なくともはっきり指摘できる。したがってこの傾向の最も重要な



帰結は、それらの「かたい本」が支えてきたナショナルな文化的公共圏の解体である。もはや商業出版や新聞のメカニズムを、文化的公共圏を担う中心的なものとして考えることはできない。われわれはいずれ、これまで一般的だったナショナルな読者市場の論理とは異なる仕方で、文化の公共性を担う社会的な機構を考えなければならない。それはかつてのような同質的に「ナショナルなもの」ではなく、「ローカルなもの」であると同時に「グローバルなもの」となろう。このような新しいパブリックな文化を支える機構として、たとえば公共図書館はいかなる役割を果たしていくべきなのか。また博物館や美術館、諸々の文化センターなどの公共文化施設でいかなる変革が可能なのか。それぞれの地方の書店は、新しいメディア環境のなかでどのような地域の公共文化の担い手となれるのか。翻訳という実践は、どのような新しい相互的なネットワークのなかで営まれていくべきなのか。フリーのジャーナリストや独立の出版プロダクションがどのような役割を果たし、いかなる新しい本の流通機構が組織されていかなければならないのか。さらには学校やNGO、NPOなどのネットワークは、それぞれの文化的、社会的実践と新しい出版と読書の仕組みをどのようにつないでいくことができるのか。

読書をパーソナルな行為としてよりも、社会的、集合的な実践として捉えるならば、「人が本を読まなくなる」ことをめぐって論じられるべきなのは、一人ひとりの読書する人の危機という以上に、むしろパブリックな文化を支えていくさまざまな仕組みへの取り組みであり、またその危機である。もしもわたしたちが、思考し、構築し、対話することを手放したくないのなら、わたしたちは永久に本を捨てることはできない。なぜなら、わたしたちはどこまでも、文字のなかで考え、築き、語り続けるからだ。わたしは、独りで本を読み、文章を書く。これは個人的な行為である。しかし、わたしが本を読むのは、一人だけでそうするのではない。わたしは他者と共に、独りで読むのである。他者はどこにいるか。他

者とどう言葉を分かちあうのか。市場としての読者と他者としての読者をいかにして和解させるのか。そのありようは、決してベネディクト・アンダーソンが出版資本主義について論じたような、ナショナルに同時的な形式ばかりではないのではないか。書物はそうしたナショナルな共同体を越えて、言葉が開かれていく可能性をわれわれに与えた。出版という産業は、確実に近代の資本主義の一部であり、その原型ですらあったのだが、はじめから産業以上のものであった。それはネットワークであり、さまざまな技能の人々が、一定の文化的基盤のなかで結びつくことで成立していた。それなら私たちは、本というメディアを再び、書き、出版し、読むことのネットワークに開いてもいいのではないか。また、そのようなネットワーク的な共同性を、図書館、出版社、学校、大学、新聞や放送などのメディア、市民運動など諸々の機構が、よき意味で連携しながら創出していく努力を自覚的にしてもいいのではないか。わたしたちの共同感覚は、「深い読書」を失うことが、自分たちの共同性そのものの危機となることを自覚できなくなってしまうほどには衰えていない、そうわたしは信じたい。

（追記）

本稿はもともと、「人はなぜ、本を読まなくなったのか?」というテーマをめぐり、二〇〇〇年五月から九月にかけて繰り広げられた『本とコンピュータ』誌による「100日議論」の冒頭の問題提起として書かれたものである。ここでの問題提起の前後で、多くの論者によってなされていった議論は筆者の視界をはるかに超える刺激的なものであった。いま、本稿を改めて本書に収録するにあたり、いくつかの重要な指摘について、あえて追記として紹介しておきたい。

まず、本当に本が読まれなくなっているのかという点に関し、右記の議論の続編『読者は変わったか?』（トランスアート、二〇〇二）で、永江朗が毎日新聞や家の光協会の読書調査を参考に、読書率はむしろ増加傾向にあり、本は必ずしも読まれなくなってきているとは言えないこと、しかし学校生徒では、読む生徒と読まない生徒の差が著しく広がっていることを指摘している。一般に「読書離れ」が進んでいると断言はできないが、「読む人」と「読まない人」との二極分化は確実に進んでいるのが現状のようだ。こうしたなか、筆者は本稿で「かたい本」を触媒にした文化的公共圏が急速に崩壊してきている根底には、ナショナルな基盤の喪失という問題があるのではないかと論じた。これに対して加藤典洋は、むしろ書き手としては、「かたいこと」を「面白い」問題として取り上げる能力をもつ書き手が減り、「かたい本」が面白くなくなってきたからだと考えるべきではないかと指摘する（「読むことの衰退、この新しい現象に向き合う」同右書）。この観点は、文学批評者としての加藤のスタンスからはまったく納得のいくものだが、筆者はより社会学的な問題意識に近いところにいるので、どうしても書き手よりも読み手、言葉や文体よりもメディアや制度に関心が向かう。他方、本稿では抽象的にしか提起できていない現在の閉塞的状況からの出口については、津野海太郎が、紙に大部数を印刷することを前提にした本というメディアから、インターネットを使った電子出版やプリント・オン・デマンドによる小部数出版、電子書籍端末など、本の形態自体の多様化が出口を示唆しているのではないかと論じている。図書館や多言語翻訳、文化的リテラシーの継承など、いくつかの解決すべき問題と結んでこうした方向を考えたい。

これらの観点も含め、本稿の議論を精緻に発展させたのは、長谷川一の未発表論文「『人文書』空間の生成と崩壊」である。長谷川は同論文を、拙稿への「長い註釈」と位置づけているが、その視点は「註釈」を超えて重要な視座の提示になっている。彼はまず、アメリカと比較したときの日

本の学術出版の特徴として、①出版が必ずしも大学人事に直結しない、②ジャーナル出版が不在、③モノグラフ出版が多数の出版社に分散している、④モノグラフの事実上の不在、の四つを指摘する。今日の危機にしても、アメリカでは「学術出版を担うべきセクターの商業化に起因するものとして主に研究者側の視点から」捉えられているが、「日本で『危機』を語る多くが出版業界の人間であり、そこでいわれる『危機』とは、もっぱら『人文書』の販売低迷とこれに起因する『人文書』出版社の経営環境の悪化」を指している。こうした指摘の上で長谷川は、日本ではこれまで「人文書」がきわめて定義曖昧なまま括られてきたこと、流通が極端な寡占状態に置かれていること、委託・再販制の問題や雑誌と書籍の一元的流通など、日本の「人文書」が構造的に抱える問題点を摘出している。そして、今日の危機を乗り越えるには、「人文書」という概念そのものを新たに開かれたメディア的地平に向けて変革していく必要があるとの提起をしている。



# メディア・リテラシーと文化の批判的実践

## 一　メディア・リテラシーとは何か

メディア・リテラシーへの関心が高まっている。わたしたちは日常、新聞記事やテレビ番組をどのような前提のもとに見ているのだろうか。また逆に、それらは新聞社やテレビ局のどんな意図や編集方法、認識と表現の枠組みによって構成されているのか。新聞の記事やテレビの番組は、単に特定のイデオロギーや影響力によって歪められているという以上に、個々のジャーナリストの認識構図や編集過程で働く無意識のコードによって枠づけられている。他方、わたしたちのこれらのメディアについての読みとりは、ジェンダーや階級、世代などでどう異なり、この差異にどんな矛盾や葛藤が含まれているのか。そしてこうしたメディアに媒介された現実を、わたしたちはどう問題にしていけるのか。

これらの問いの重要性が、近年、ようやく日本でも認識されつつある。その背景には、湾岸戦争やオウム真理教事件などでの苦い経験を通じ、この国でもメディアの作用を批判的にとらえかえしていく必要性が痛感されてきたことがある。実際、八〇年代以降のわたしたちの日常意識に、テレビをはじめと

**著者略歴**

吉見俊哉（よしみ　しゅんや）

1957年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。
専攻は、社会学、カルチュラル・スタディーズ。
現在、東京大学社会情報研究所教授。
著書に、『都市のドラマトゥルギー』（弘文堂、1987年）、『博覧会の政治学』（中公新書、1992年）、『メディア時代の文化社会学』（新曜社、1994年）、『「声」の資本主義』（講談社選書メチエ、1995年）、『リアリティ・トランジット』（紀伊國屋書店、1996年）、『メディアとしての電話』（弘文堂、共著、1992年）、『都市の空間　都市の身体』（勁草書房、編著、1996年）、『カルチュラル・スタディーズとの対話』（新曜社、共編著、1999年）、『メディア・スタディーズ』（せりか書房、編著、2000年）、『内破する知』（東京大学出版会、共著、2000年）、『グローバル化の遠近法』（岩波書店、共著、2001年）など。

カルチュラル・ターン、文化の政治学へ

二〇〇三年五月一日　初版第一刷印刷
二〇〇三年五月一〇日　初版第一刷発行

著者　吉見俊哉
発行者　渡辺睦久
発行所　人文書院
〒六一二-八四四七
京都市伏見区竹田西内畑町九
電話　〇七五(六〇三)一三四四
振替　〇一〇〇〇-八-一一〇三

印刷　創栄図書印刷株式会社
製本　坂井製本所

©Shunya Yoshimi, 2003
JIMBUN SHOIN Printed in Japan
ISBN4-409-04059-6 C3010

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。